

明治(1896)三陸津波の死者数と文献上の混乱、 更に、服部一三・岩手県知事の被害報告について

山下 文男*

§1. はじめに—今も残る文献上の混乱

明治三陸津波の死者数は、長い間、文献上、2万7122人(『理科年表』その他)、あるいは、2万6360人(『日本被害地震総覧』その他)などとされてきたが、拙著『哀史三陸大津波』(1982年)と『写真記録近代日本津波誌』(1894年)の中での問題提起、即ち「この死者数は実際よりも著しく過大であり、実数に近い数値に訂正すべきである」との提起を契機として『理科年表』は昭和60年(1995)度版から死者数を、それまでより約5000人も少ない2万1959人と書き改め、以来、明治三陸津波の死者数は約2万2000人とする説が、実数に近いものとして学者・研究者の間で定着しつつある。

しかし一方では、従来からの約2万7000人とか2万6000人とかいう誤った、過大な死者数が、今日もなお、一般に信頼度の高い文献、例えば、宇佐美龍夫『新編日本被害地震総覧』(東大出版会)、『近代日本総合年表』(岩波書店)などの中に、そのまま残っていて、これに依拠した、津波防災への取り組みに影響を与えかねないような数値上の混乱が、一部の研究者によって現地である三陸沿岸住民の間にまで持ち込まれたりしているし、一般の防災関係者の認識も、文献上の混乱の影響を受けて、まちまちのままになっている。

については、これについて、あらためて

経過を振り返り、問題を提起したい。

§2. 問題は岩手県の死者数

まず、約2万7000人、あるいは、約2万6000人とする明治三陸津波の死者数は、何故、誤りなのか? 何故、約2万2000人に修正すべきなのか、ということである。これはまず、明治三陸津波の最大の被害地であった岩手県沿岸の死者数を、どう見るかの問題である。

即ち、明治三陸津波の死者数は、約2万7000人、あるいは約2万6000人としたのは、岩手県の死者数を、約2万3000人、乃至、約2万2000人とした文献に依拠し、それに宮城県や青森県などの死者数を加えると、約2万7000人、乃至は2万6000人という計算になるからであった。ところが、岩手県の死者数はもっと少なく、約1万8000人であるという文献が別にあって、その方が実数に近いことが判明した。これに宮城、青森などの死者数を加えると約2万2000人ということになる。

なお、加算すべき宮城県(約3400人)や青森県(約340人)北海道(6人)の死者数は、どの文献でも大差がなく、問題になっていない。

それなら、岩手県の死者数の大差と混乱は何に起因したのか?

岩手県における明治三陸津波の被害数値については、災害後の時間の経過にともなった、第1報、第2報、第3報、

* 〒022-0211 岩手県三陸町綾里石浜八ヶ森 75

第4の最終報と、4つの報告があった。ところで、これらの報告に記載されている家屋の被害数などは、どの報告でも、ほとんど変化ないが、死者数には、それぞれに大差があって、そのいずれに依拠するかによって大きな違いが出てくるからである。

そこで、少々、煩雑ではあるが、順を追って、その報告内容を検討して見る。

2.1 岩手県警の第1報

第1報は、岩手県警が、津波4日後の「6月19日午後6時迄の諸報告を集めて調査編成したる海嘯被害数の一覧」表（『東京日日新聞』）に示されている死者数で、岩手県の死者総数を2万2565人とするものであった。この一覧表の全文を掲載した当時の新聞（『東京日日新聞』）が、「その後、あるいは被害数の増減を発見したるものあらん。今は、ただ、その概略を示すのみ。正確な被害表の如きは詳細の調査をうるの日、重ねてこれを掲げん」と、書いていたことでも明らかかなように、今後の増減を予想した、あくまでも調査過程での概数であって、まだ、粗雑で不確かな調査報告に過ぎなかった。

元々、史上、最大級と云われるほどの大津波の、僅か4日後の時点での調査報告が正確でありようはずがなかった。これは、明治三陸津波よりも遙に死者数の少なかった1995年の「平成7年兵庫県南部地震」の死者数が確定するまで、ほぼ半年を要したことを見ても明らかである。このように、内容的に最も粗雑な被害報告が、津波のわずか4日後にまとめられた、県警によるこの第1報であった。が、県警の調査ということで信頼を寄せたのか、この一覧表による死者数が一人歩きして宮古測候所の文書に掲載され、更には、後に、昭和の三陸津波の

記録を作成する際、それを引用した形で岩手県の公文書である『岩手県昭和震災誌』や『震浪災害土木誌』にも、参考として、誤って掲載されてしまった。そして、研究者からも正確なもののように見なされ、岩手県のこの一覧表による総数に、宮城、青森などの死者数を加えて、明治三陸津波の死者数は全体で2万6360人、約2万6000人であるということになった。『日本被害地震総覧』などがそれである。

2.2 岩手県知事の第2報

第2報は、津波から9日後の6月24日に、「その概数は左の如し」として、岩手県知事服部一三から、内務大臣板垣退助に宛てた報告によるもので、被害各町村の内訳を示しながら、岩手県の死者は総数2万3309人であるとするものであった。前の報告よりも、更に750人近く多い数である。

この死亡者数も、記載されているように、あくまで「概数」に過ぎなかったのであるが、同様、一人歩きする結果となり、これに依拠する向きは、宮城県や青森県などの死者数を加えて、明治三陸津波の死者数は全体で2万7122人、約2万7000人であるとした。昭和59年度までの『理科年表』（丸善）などがそれであり、『近代日本総合年表』や『広辞苑』（共に岩波書店）なども、この死者数に依拠していて今日なお修正しておらず、明治三陸津波についての一般の知識の拠り所とされている。

2.3 第3報「概数取調一覧表」

第3報は、6月29日付の「岩手県管内海嘯被害概数取調一覧表」という文書に記載されている死者数で、やはり、町村別の内訳付で、岩手県の死者は総数2万1811人とするものであった。前の報告よりも一転して約1500人も少ない数

である。いずれにしろ、これも、あくまで「概数」であったが、これに依拠する向きは、更に、宮城県や青森県などの死者数を加えて、明治三陸津波の死者数は、全体で2万5500余人であるとした。但し、この数値は、岩手県史の第1人者といわれた故・森嘉兵衛氏が『岩手近代百年史』などに採用しているだけで、地震津波関係の文献には見当たらない。

2.4 岩手県の確報となった第4報

第4報、というよりも、これが最終報であり、岩手県としての確報となったのであるが、拙著『哀史三陸大津波』を執筆する過程で国会図書館から見つけ出した、山奈宗眞という人物による、津波から25日後の7月10日付け「三陸大海嘯岩手県沿岸被害調査表」にまとめられている死者数で、岩手県の死者は総数1万8158人となっている。これまでの報告よりも、急転して、4000人から5000人も少ない数である。

この調査表には、家屋と人間の町村別被害一覧表の他に、その部落別の内訳を示す「岩手県海嘯被害戸数及人口調表」や、町村別、部落別「被害船舶及現存調表」等々、各分野の被害情況を示す詳細な付属文書があって、ただ、家屋と死者などの町村別内訳だけを記したそれまでの報告とは比較にならない実に綿密、詳細なものとなっている。

ところで、岩手県の死者を1万8158人とする、この数値自体は、早くから知られており、岩手県が盛岡地方气象台との共同で刊行した『岩手県災異年表』は、この数値をもって明治三陸津波の岩手県における死者総数としていたし、藤井陽一郎編の『写真図説地震』なども、この数値に依拠し、それに宮城・青森などの死者数を加えたと思われる2万1909人という数値を示して、明治三陸津波の

死者総数としていた。

しかしながら、国会図書館で保存してあった文書が見つかるまでは、一体、誰が調査した被害数値なのか、岩手県は、この被害数値をどのように位置づけているのかなどが不明であったし、右で述べた、被害の詳細な内訳を示す付属文書も、学者・研究者の目に触れるところには出でいなかった。

その後、この山奈宗眞なる人物は、岩手県の遠野周辺に居住する学識者であり、明治三陸津波の被害を調査するために、岩手県によって臨時囑託に任じられた人物であることが判明し、右の被害調査表の公的な性格が明らかになった。更に、岩手県が、津波から1カ月余を経た7月27日に、復興対策のための県会（議会）を召集した際、冒頭で県知事が行った被害情況報告の中でも、死者1万8158人という、この数値が岩手県の死者総数として確認されていたことが『岩手県議会史』によって判明し、結局、岩手県としての確報であったことが裏付けられた。以後、岩手県は、この調査表による数値を訂正する文書を出していないし、新たな被害調査表なども発表していない。したがってこの調査表に示されている死者数1万8158人、概数で云えば約1万8000人というのが、岩手県として公的、最終的なものと見て、差し支えないという確信になった。

§3. 『理科年表』の改定と『新編日本被害地震総覧』の扱い

こういうことから、NHKなどが問題にしたこともあって、『理科年表』は、それまで、2万7122人としていた明治三陸津波の死者数を、昭和60年度（1985）版から、「死者は青森343、宮城3452、北海道6、岩手18158」と改定した。即

ち、合計 2 万 1959、概算で約 2 万 2000 人ということである。『日本被害地震総覧』も、1987 年に刊行された『新編』から、山下の著書（『哀史三陸大津波』）を参考文献として示しながら、「岩手県の被害としては最も信頼のおけるもの」との注釈付で、山奈宗真による「岩手県海嘯被害戸数及人口調表」を、項の終わりに収録した。が、表の初めに付している、従来からの「三陸沿岸の津波被害と集落移動」の中にある明治三陸津波の死者数は、以前のままで訂正されず、更に「3つの地震津波による被害の比較」の中で示されている、明治三陸津波の岩手県における死者数も、2 万 2565 人と、以前のままで訂正されなかった。

これによって、初めの一覧表では、明治の三陸津波の項で、岩手県警の第 1 報による死者数、即ち、粗雑で不正確な死者数が全町村にわたって示され、次に 3 つの津波による被害を比較した一覧表でも、同様、岩手県警の第 1 報による死者 2 万 2565 人、岩手、宮城、青森の 3 県合わせて 2 万 6360 人という従来からの死者数が記載されたままになり、岩手県が公的、最終的に確認した死者数の方は「最も信頼のおけるもの」としながら、実際の取り扱いとしては、参考的なものとして末尾に示されるという扱いになってしまった。こうして『新編日本被害地震総覧』では、内容の全く異なった（矛盾する）二つの死者数の一覧表が奇妙な形で同居し、しかも、ともすれば、初めの方に示されている粗雑で不正確な数値の方を、それとは知らずに利用したくなるような構成・編集になっている。その後 1996 年に刊行された、同書の〔増補改定版〕でも、そのままになっており、それらが、今日でも一部の不注意な学者・研究者の誤用を招く基になっている。

§ 4. 問題は総数ではなく町村別死者数いずれにしろ、『理科年表』の改定によって、明治三陸津波の死者は、それまで考えられていたより、4000 人から 5000 人も少ない数であったことが判明した訳であるが、その全体としての死者数を云々するのが、私の問題提起の真意ではない。2 万 7000 人であろうが、2 万 2000 人であろうが、明治三陸津波は、わが国の津波災害史上、最大、最悪の大津波であったことに変わりない。

問題は、『日本被害地震総覧』が『新編』でも、更に『増補・改定版』でも、従来のまま一覧表に記載している、岩手県の死者総数 2 万 2565 人の町村別の内訳が、少なからぬ町村で、寺の過去帳その他で裏付けられている実数に照らして、途方もなく過大であったり、過少であったりしており、全体として信用できないし、地域防災計画上、ほとんど参考にならないだけでなく、それを混乱させる基になりかねないということにある。今更、何故そんなことに言及するのか？これに依拠した、とんでもない誤った「死者数」が、大学のアンケート調査などにあたって、地域住民に示されたりしているからである。

4.1 ある大学のアンケート調査

1996 年の秋、岩手大学工学部建設環境工学科都市工学研究室が行った私の地域でのアンケート調査の際、過去の津波の被害データの一つとして、三陸町・旧綾里村での、明治三陸津波の死者は 330 人であるとの文書が各戸に配付され、啞然とした。何故なら、実際よりも、死者数が 1000 人も少なくなっているからである。

明治三陸津波での旧・綾里村の死者は、寺の過去帳と、それによる『村誌』では

1350 人、気仙郡の死者の霊を刻んでいる大位牌では 1344 人、岩手県の確報(山奈調査表)では 1269 人となっており、いずれにしろ、明治三陸大津波では、旧・綾里村で 1300 人前後が死亡したというのが真実に近く、また、地域住民の共通の認識になっている。そして重要なことは、そういう事実認識に基づいて、地域防災計画が樹立され、避難訓練なども行われている。ところが、国立大学のアンケート調査表に書かれていることによると、死者は 1300 人ではなくて、330 人だというのである。本当は、これまで聞いていたよりも、わが村の死者数は 1000 人も少なかったのか?と、住民の認識を混乱させ、その防災意識と熱意に水をさすことになりかねない。このアンケート調査自体は意味のあるものであったが、大学などのアンケート調査で示されるデータの重みと影響ということ、この調査を行った研究者たちは、自覚すべきであろう。

4.2 権威ある文献の影響

ところが、詳細な理由を付して取り消しを求めた意見具申に対する、右研究室の返事は、結局「明治 29 年、昭和 8 年、昭和 35 年の津波被害に関して同一の表にまとめてある文献が『新編日本被害地震総覧』であったため、当文献を用いました」と、にべもなかった。権威ある文献の中で、一度、活字になってしまった数値とその影響を消し去ることの難しさを思い知らされた感じであるが、いずれにしろ、このままだと、今後とも、善意の研究者によって無批判に利用され、実際と駆け離れたことが書かれたり、話されたりして、現地に混乱を持ち込む基になりかねない。実際にも過去にそういうことがあって、ある学者が住民から、その誤りを指摘され、戸惑ったという例

がある。

実際の死者数よりも、過少な数値が示されたからというだけで、これを問題視しているのではない。右の文献に依拠すると、文末の別表でも分かるように、例えば、小友村では、実数に近いと見られている最終調査による死者数(211 人)よりも、約 6 倍以上も多い 1412 人という死者数を示すことになるし、普代村では約 9 倍、大船渡村では約 8 倍、津軽石村の如きは、実に 60 倍以上もの死者数を示すことになる。これは、リアリテーを欠いた、途方もなく過大なことを云うに等しい。

§5. 信用できない混乱した一覧表

『新編日本被害地震総覧』(P177~180)ならびに、その『増補・改定版』(P188~191)に収録されている、右の第 1 報による明治三陸津波における岩手県の町村別死者数なるものが、全体として、如何に、粗雑で、信用できないものであるか、参考までに、これまた同書(P183~186)ならびに、その『増補・改定版』(P194~197)に収録されている、岩手県としての最終的な調査報告(「岩手県海嘯被害戸数および人口調査」)による死者数と対比した一覧表を文末に示しておく(「明治〔1896・6・15〕三陸津波・岩手県の死者数についての対比表」)。

見てのように、第 1 報による死者の総数は、最終調査報告と比較して 4400 人余も多くなっているが、各町村別の内訳を見ると、全ての町村で多かったのではなく、多い町村もあれば、少ない町村もあり、そして、全体として多かったことになる。

ところで、この多かたり、少なかたりしている程度であるが、それが極端

に多かったり、極端に少なかったりしている町村が少なくなく、総数に端数がついていて如何にも実数であるかのような体裁になってはいるが、5000人（釜石）をはじめ、所謂、ポッキリ数字も多く、一つ一つを検討すればするほど、とても信用する気になれない。

§6. 粗雑な調査報告の原因

何故、このように粗雑な調査報告ができたのか。実は、この報告書の混乱自体が、明治三陸津波が、特に、岩手県にとって想像を絶する大災害であったことを反映している。

宮城県の場合は、人命被害も、岩手県に比して、約6分の1の3000余人であったし、海岸沿いに位置する宮城県第2の都市である石巻市の被害が軽微であったため、仙台市にある県庁への緊急報が敏速で、行政機関や仙台市付近に駐留する陸軍第2師団などの対応も割合に早かった。そのため宮城県の被害地では、死者の検視が実施された町村などもあり、岩手県沿岸に比べて、混乱ははるかに少なかった。

しかし、岩手県の場合は、大津波襲来についての第1報が県庁に届いたのが、津波から10時間後の翌朝の6時で、しかもそれは現地からではなく、青森県庁からの急電によるものであった。こうして岩手県では、最初から、後手に後手に回ってしまった。

岩手県知事（服部一三）が、津波のあった事実を政府に報告したのは、これより、更に12時間おくれての16日午後6時40分、沿岸の町村が大被害の様子で、目下、状況取り調べのために係員を派出中という、同様、知事による電報が、翌17日（津波後1日半を経過）午前8時50分となっている。焦ってはみても、

被災地と、県庁所在地である盛岡市とが、北上山系の山々によって閉ざされ、その被害地の町村自体も、更に、一つ一つが背後と両脇を山で閉ざされているので、県庁や内陸部に所在する郡役所などから出張して実情を把握しようにも容易でなかった。

そのため、津波後2、3日は、内陸部に逃れてきた人々による、釜石も全滅、盛方面も全滅、大槌も、宮古も全滅、などという噂と、被害地に近隣する町村や警察からの断片的な報告によって事態を想像するのみであった。

明確なのは、岩手県にとっての未曾有の大災害であること、救援を急がなければならないこと、そのためにも政府の援助が必要で、それも急を要するということであった。

しかし、ただ漠然とした救援の要請では迫力がない。流失家屋や死亡者の概数だけでも、至急、まとめて政府に報告し、これを新聞などに発表して救援を訴えなければならない。推測すれば、こうして、急遽、まとめられたのが、岩手県警による6月19日付けの第1報であった。だから、中には、ただ想像だけで書き込んだと思われるような死者数も少なくない。

岩手県警が、如何に、この報告を急いだか？

この6月19日には、被害を報告する悲痛な電報が、次々と打電されている。まず、午後1時発電のもので、死者1万4970人とするものであった。次は、同日午後4時20分発電で、気仙郡の死者は凡そ6000余人、釜石方面は死者8334人、宮古方面は死者5627人となっている。そして、同日の午後9時半発電で岩手県の死者は2万2186人となり、これが修正され、しかも町村別の内訳を付し

て発表されたのが、これまで、たびたび紹介してきた6月19日付き岩手県警の第1報で、死亡2万2565人とするものであった。右のような経過でも判るように、この被害報告は、慌ただしく、取り敢えずとりまとめたものに過ぎなかった。そのため、しばしば多めに推測した死者数になった。釜石の5000人(3765)、津軽石村の1028人(16)、小友村の1412人(211)、大船渡村の832人(110)などである。

もっとも、反対に過少に推測された死者数もかなりある。唐丹村の328人(1684)、綾里村の330人(1269)などである。これらは、いずれも郡役所から遠隔の村であり、実情が全く掌握されていなかったためと思われる。

そして、結果として差し引きすると、第1報は、後に確定した死者数よりも、文末の別表のように、全体として4000人以上もの過大な死者数となった。

しかし、このように、第1報が、結果的に、粗雑な報告になったとしても、当時の事情からして、やむをえなかったと思う。地の利がよく、被害もはるかに少なかった宮城県でさえ、まだ、この時点(19日)では、やっと「当該官衛」によって、被害の中間集計が行われたと、新聞(『東京日日新聞』)に報じられる状況であった。

§7. 生存者が4000人も含まれていた死者数

それにしても、死者数が、時間の経過とともに増加したというのなら理解できるが、逆に、減少した、しかも20日ぐらいの調査期間内に4000人以上も急減したとは、どういうことだろう？

これもまた、被害の大きさと直後の混乱を反映したものであった。

まず、当時、どのような方法で死者を数えたか？

死亡者の多い地域や村では、村会議員や役場職員、駐在巡査など村の幹部までがほとんど死亡し、村の機能が完全にマヒしてしまったところも少なくなかった。そのため、こういう村では、内陸部から急遽、駆けつけた、土地勘も、地域の事情にも疎い応援の警察官や官吏などが被害調査に当たった。死者の数は途方もなく多かった。とても、これを一人一人検視し、数えている余裕はない。そこで、手っとり早い方法として、まず、生きている人間を数え、あるいは推定し、役場や郡役所に登録してある、その地域や村にあった人口から、生きていると思われる者の数を差し引いて死者の概数を割り出したりした。被災直後の新聞に「僅かに生存者を数えるに」とか「生存せるは節句のために余所に行きおりし者、漁のために沖に出でおりし者のみ」というような記事があるのはそのことを示している。はっきりと「生存者を数えて死者数を推し量るに」と書いている場合もある。こうして、出稼ぎ者や節句(端午)で山の手の実家に泊まりに行っていた者、山に逃れたまま恐怖に震えていた者、避難して近隣の親戚などに身を寄せていた者などは、その場に見当たらないことから、多くは死んだ者と見なされ、最初は、死者の数に入れられていた。無論、死亡と行方不明者の区別もなかった。

前にも述べたように、津波後、最初に開催された岩手県会(議会)において、知事服部一三は、その被害状況を報告し、死者が1万8158人であったと述べている。

ここで付言すれば、服部一三は山口藩の出身でアメリカに留学の後、理学者と

して 1880 年に、お雇い教師のミルンやユーイング、加藤弘之や菊地大麓らとともに日本地震学会を創立し、その初代会長に就任、東京大学の副総理でもあったが、その後、官界に転出し、明治三陸津波の頃は岩手県知事になっていて、どういふ巡り合わせか、この史上、稀に見る大津波の後始末に携わることになった学者知事であった。この後、服部は、兵庫県知事なども歴任、最終的には貴族院議員になるが、終生、地震学の発展を影で支えた人物として地震学徒で知らない者のない歴史的な存在である。

さて、その服部知事は、岩手県の死者数は 1 万 8158 人であったことを確認するとともに、何故、死者数が最初の報告より急減するに至ったのか、その事情についても、次のようにリアルに説明している。

「海嘯ノ情況ト申シマスル方ニツキマシテハ、私ガ此処ニ改メテ述ヘルヲ要セズ諸君ハ既ニ御承知デモアリマセウカ、害ヲ受ケマシタ所ハ六郡七町三十箇村之ヲ部落別二分ケレバ百五十部落テアリマシタ。ソノタメ死亡シマシタ所ノ人員ハ一万八千百五十八人、コレは初メニハ二万四千人ノ死亡カアッタト思ヒマシタガ、追々、諸方ニ出稼ニ行ツテ居リマシタ人員カ帰リマシタリ、ソノ他ニ依ツテ、コノ死ンダと思ツタ者ガ活キテ居ル事ヲ発見シテ今ノ人員ニナリマシタ」

要するに、死んだと思って死者に数えていた人々が、その後、帰って来て、生きていることが分かったので死者の数が減り、最初は 2 万 4000 人も死んだと思ったのが、結局、死者は 1 万 8158 人ということになりました、というのであった。津波直後の混乱と、学者知事服部一三の困惑が想像できる報告である。『新編日本被害地震総覧』と『増補・

改定版』(東大出版会)などに収録され、今日もそのままになっている岩手県警の第 1 報による死者数や、『近代日本総合年表』(岩波書店)その他に示されている死者数は、こうして、最初は、死んだと見なされていた生存者までが、しかも 4000 人以上も含まれている「死者数」なのである。

引用は、あくまでも、それを行なう学者・研究者の責任に属することであるし『新編日本被害地震総覧』や『近代日本総合年表』などの全体としての文献的価値はあらためて強調するまでもないことだが、中世や近世の文書のように、今更、その真偽を確かめえない資料と異なり、明確に誤っていると確認できる近代の災害被害表の如きは、より正確なものがある場合には、見つかりしだい、それと入れ換えるなり、修正するなりすべきである。誤りが再生産される危険もある。現に『新編日本被害地震総覧』に掲載されている明治三陸津波の、全く、内容の異なった(矛盾する)二つの被害表は、社団法人日本電気協会刊行の『わが国の歴史地震被害一覧表』にも、注釈なしに、そのまま転載されている。

§ 8. むすび一津波研究と防災意識の高揚のために

1896 年三陸津波は、近代自然災害史上、1923 年の関東大震災に次ぐ大災害であった。だが、明治三陸大津波は、関東大震災より 20 数年も前の、明治中期の災害であったというだけでなく、東北も、わけても交通不便な辺境の地での災害であったがために、その実情は掌握し難く、不十分な調査のまま残された問題も少なくなかった。これが首都圏や大都市部、あるいは西部寄りの地方での災害であつたら、そのままでは済まされな

かたろうと思われる問題もある。ここで取り上げた死者数の問題もその一つであり、実際よりも 4000 人から 5000 人も多い死者数が、端数を付した、あたかも実数でもあるかのような装いのもとに、有名出版社の権威ある文献や辞書に掲載されたまま、異議を差し挟む研究者もなく、未だに、そのままにされている。問題は死者数の多いか少ないかに止まらない。これは巨大津波、しかも今日「津波地震」あるいは「ヌルヌル地震」とされている地震による津波の不意打ちが、事態を如何に混乱させたか、つまり「津波地震」による不意打ち津波の計り知れない恐怖を物語るものでもある。著者や出版社の理解によって、不正確な死者数

が速やかに正され、明治三陸津波についての認識と研究、とり分け地域住民の津波防災意識の高揚のために、より寄与されるようにと念じてやまない。

文献

- 国立天文台編『理科年表』（昭和 59 年度版と昭和 60 年度版・丸善）
宇佐美龍夫『新編日本被害地震総覧増補・改定版』（東大出版会）
山奈宗眞『三陸大海嘯岩手県沿岸被害取調表』（国会図書館保存）
『岩手県議会史』（岩手県）
山下文男『哀史三陸大津波』（青磁社）
山下文男『写真記録近代日本津波誌』（同）

明治（1896・6・15）三陸津波・岩手県の死者数についての対比表

▼〔6月19日付県警第1報〕		▽〔7月10日付最終調査報告〕	
気仙町	14		42
高田町	30		22
米崎村	321★		25
小友村	1, 412★		211
広田村	231☆		518
末崎村	960		676
大船渡村	832★		110
赤崎村	506		455
綾里村	330☆	1,	269
越喜来村	802★		460
吉浜村	982★		204
唐丹村	328☆	1,	684
釜石町	5, 000★	3,	765
鶴住居村	1, 069	1,	028
大槌町	900★		600
船越村	1, 250★		804
織笠村	200★		72
山田町	1, 000		828
大沢村	500		415
重茂村	496		764
津軽石村	1, 028★		16
磯鷄村	3☆		100
鍛カ崎村	100		125
宮古町	12		70
崎山村	90		129
田老村	1, 400	1,	867
小本村	376		364
田野畑村	98☆		232
普代村	1, 010★		302
久慈町	400★		212
宇部村	160		191
野田村	258		260
長内村	125★		20
夏井村	記載ナシ		41
侍浜村	100★		23
中野村	151★		68
種市村	100		186
(総数)	22, 565人	(総数)	18, 158人

(注)

▼印は「6月19日午後6時までの諸報告を集めて調査編成した被害数の一覧」

▽印は、7月10日付「岩手県海嘯被害戸数及人口調査」

★印は、最終調査に照らして第1報で著しく過大に報告されていた町村

☆印は、極端に少なく報告されていた町村。